広島大学教育学部・関係附属学校園共同研究体制研究紀要
<第27号 1999. 3>

家庭生活における世代間の相互作用に関する研究(3)

平田 道憲　岩重 博文　木下 瑞穂
片山 徹之　一ノ瀬孝恵　日浦美智代

はじめに

本研究のねらいは，家庭科教育における各分野の総合という視点からの教材化の開発である。題材として家庭生活における世代間の相互作用を取りあげた。本年度は三年度目にあたる。

初年度は，中・高校生の食生活における世代間の相互作用について検討した。食事内容，嗜好といった栄養面と食事の取り方や献立などの世代間の関連について，質問紙調査を実施して分析した[1]。家庭科教育の分野としては主として栄養学と家庭管理学の総合という視点を含めて考えた。第二年度は，調査結果に基づいた初年度の実証的な研究経験をとおして，家庭科教育における世代間相互作用の考え方を整理することの必要性を認識した。栄養学，家庭管理学に，住居学，家庭工学的な観点を加えて家庭科教育における世代間相互作用のとらえ方を理論的，実証的に検討した[2]。

本年度は，本研究の当初のねらいである高齢者との同居あるいは別居による生徒の食生活への影響についてより詳細に検討することを目的とした。本研究の最初の問題意識は，祖父母との同居が生徒の食生活，栄養摂取にどのような影響を与えているかを明らかにしたいということであった。祖父母との同居は食事内容を高齢者向きなものにするのであろうか。高齢者にあわせた献立は，生徒の食生活をいい方向に向けるのか，あるいは生徒の食生活を不満なものにしてしまうのか。このような問題意識を発展させて，初年度の調査研究においては，研究の枠組みとして，世代間相互作用というものを，生徒と祖父母世代だけではなく，生徒と両親世代との相互作用をも含めて考えることにした。生徒の食生活は，世代間相互作用という視点から考えれば，祖父母世代だけでなく，両親世代からも影響を受けると考えたからである。

この研究枠組み設定の背景には，理論的な側面に加えて，初年度における質問紙調査の対象者が広島大学附属中・高等学校の生徒であることからくる現実的な制約も含まれていた。つまり，広島大学附属中・高等学校の生徒の祖父母との同居率はあまり高くないという事前の予測があったからである。しかしながら，初年度においては，調査対象を広げるのではなく，世代間のとらえ方の枠組みを広げることを考えた。

初年度の結果は，生徒の食生活において，両親世代および祖父母世代との間に相互作用があることを明らかにしている。その中で祖父母世代との相互作用の中には当初の問題意識に照らして注目すべき結果もあり，あらためてより詳細な検討を要請するものであった。そこで，今回は，調査対象の生徒の範囲を広げることにより，祖父母との同居あるいは別居による食生活への影響を調査することにした。ただし，生徒の学校段階については，中学生を除外して高校生のみに注目することにした。

本稿においては，まず，2回の調査の概要について述べたあと，高校生の食事の取り方について，摂取の有無，孤食（ひとりで食べること），個食（ひとりだけ異なる献立の食事）などの観点から，祖父母との同居，別居別に分析する。次いで，高校生の食事の満足度について，味付けや献立の好みの視点から，同じく同居，別居別に検討する。最後に三年間の研究結果の知見をふまえ，今後の家庭科教育に対する提言を行う。

I　2回の調査の概要

本研究では，次の2回の質問紙調査を実施しその調査結果を利用している。本稿で分析に利用する範囲の各調査の概要は次のとおりである。

(1) 第1回目調査

1)調査対象：

広島大学附属高等学校　2年生（男子42名，女子32名，合計74名から回収）

2)調査時期：

1995年12月

3)調査方法：

家庭科の授業において教官が生徒に対して説明，配布し，後日学校に持参させて回収した。

Michinori Hirata, Hirofumi Iwashige, Mizuho Kinoshita, Tetsuyuki Katayama, Takae Ichinose, Michiyo Hiura: A study on the intergenerational relations in family life (3)

4)調査内容：
調査内容のうち，本稿で利用する主な項目は次のとおりである。
・家族構成　・食事の同席者　・家族成員の食事内容の相違　・献立および味付けについての満足度など
5)祖父母との同居率：
18.9%
(2)　第２回目調査
1)調査対象：
広島大学附属高等学校　１年生（男子41名，女子31名，合計72名から回収）
広島大学附属福山高等学校　１年生（男子44名，女子33名，不明 2名，合計79名から回収）
広島県立黒瀬高等学校　１，２年生（男子 8名，女子57名，不明 9名，合計74名から回収）
2)調査時期：
1997年10月
3)調査方法：
家庭科の授業において教官が生徒に対して説明，配布し，後日学校に持参させて回収した。
4)調査内容：
調査内容のうち，本稿で利用する主な項目は次のとおりである。
・家族構成　・食事の摂取状況　・食事の同席者　・家族成員の食事内容の相違　・献立および味付けについての満足度など
5)祖父母との同居率：
３校合計で28.0%（広島附属18.1%，福山附属31.6%，黒瀬高校33.8%）

II　祖父母との同居別居別にみた高校生の食事の取り方

ここでは，高校生の食事の取り方について，摂取の有無，食事の同席者，食事内容の三つの観点から祖父母との同居，別居別に検討する。同居，別居別の分析には主として第２回目調査の結果を用いている。

1)朝食，夕食の摂取

この質問は第２回目調査においてのみ実施した。朝食を「必ず食べる」高校生は72.2%，夕食を「必ず食べる」高校生は85.2% である。朝食より夕食でこの比率が高いことは夕食中心の日本の食生活を考えるとむしろ常識と合致する結果であるといえる。

図2-1 はこの比率を祖父母との同居別居別に比較したものである。これによると，朝食，夕食ともに別居の場合の方が摂取率が高い。とくに朝食でその差が大きく，「必ず食べる」比率は同居の60.3% に対して別居では77.1% になっている。今回の調査結果だけから結論づけることは困難であるが，祖父母との同居が朝食や夕食の欠食と結びつく可能性を示唆しているといえる。もしそうであるなら，その理由を明らかにしていかねばならない。今後の追試調査によって継続的にとらえていくべき課題である。

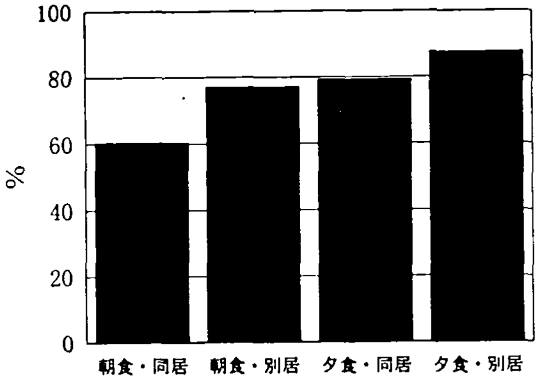

図２－１　朝食・夕食の摂取状況

2)朝食，夕食における孤食

第１回目調査において食事の取り方における孤食と個食に注目した。孤食とは他の家族と一緒にではなくひとりで食事をすることであり，個食とは，他の家族成員と異なる献立の食事をすることである。個食は孤食の場合もあるけれども，他の家族と一緒の食事においても個食の場合がある。

はじめに，ひとりで食事をする孤食について検討する。第１回目の調査において高校生の孤食率は朝食48.6%，夕食17.6% であった。第２回目調査では朝食35.2%，夕食3.7%である。ただし，第２回目調査ではこの質問を自由記述式にしたため無回答が多く，無

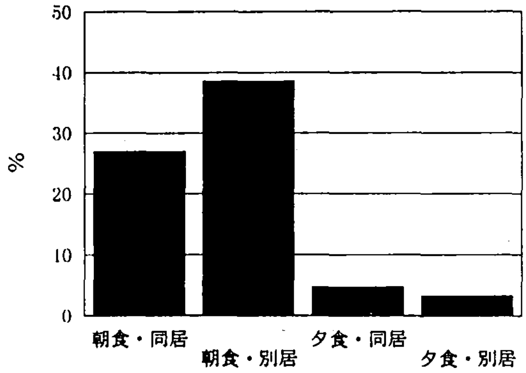

図２－２　朝食・夕食の孤食率

回答を除いて計算すると孤食率はもう少し高くなる。

図2-2 は祖父母との同居別居別に朝食と夕食の孤食率を比較したものである。夕食は全体の孤食率も低いので同居と別居とで差がみられないが，朝食については，同居の高校生の孤食率が27.0% であるのに対して別居の高校生の孤食率は38.6% になっている。前述のとおり，第２回目の調査において，祖父母との同居が朝食の摂食に対してはむしろ阻害要因になっている可能性があるものの，孤食に対しては減少させる要因となっている。

3)朝食，夕食における個食

次に個食の側面について分析したい。調査データとしては，個食の反対である「家族が全員同じものを食べる」という比率に注目した。第１回目の調査において，高校生の家庭において「家族全員同じものを食べる」という比率は朝食55.4% ，夕食77.0% であった。第２回目の調査では朝食41.2% ，夕食63.4% である。この質問についても，第２回目の調査においては第１回目調査よりは多くの無回答があった。

図2-3 はこの「家族全員同じものを食べる」という家庭の比率を祖父母との同居別居別に示したものである。図にみられるとおり，この比率は，朝食，夕食ともに同居と別居との間にほとんど差がみられない。仮説的には核家族よりも祖父母と同居している拡大家族の方が多様な原因によって家族成員の献立が一致しないと考えたが，今回の調査結果はそうした仮説を支持していない。

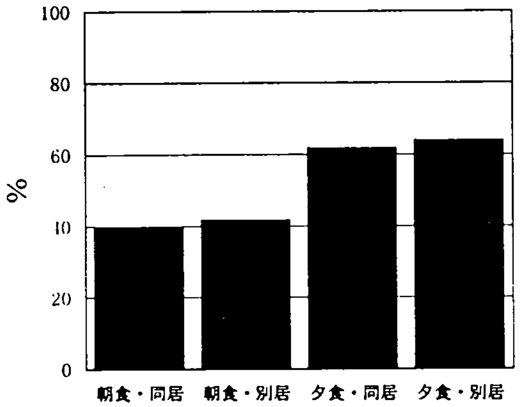

図２－３　朝食・夕食の献立が家族全員同じ家庭の比率

4)夕食における高齢者との同席と個食

この「家族全員同じものを食べる」家庭の比率について別の観点から検討するために，実際の食事の時に祖父母と同席するか否かによる相違を分析した。分析においては，夕食時に祖父母と同席（一緒に食べる）しているか否かを用いた。

図2-4 はこの祖父母との夕食の同席別に朝食および夕食に「家族全員同じものを食べる」家庭の比率を比較したものである。これによると，朝食，夕食の場合とも，祖父母と同席する高校生の家庭の方が「家族全員同じものを食べる」家庭の比率が高い。逆にいえば，祖父母と同居していても，夕食を祖父母と一緒に食べない場合には高校生と祖父母の食べるものが異なっている可能性を示している。

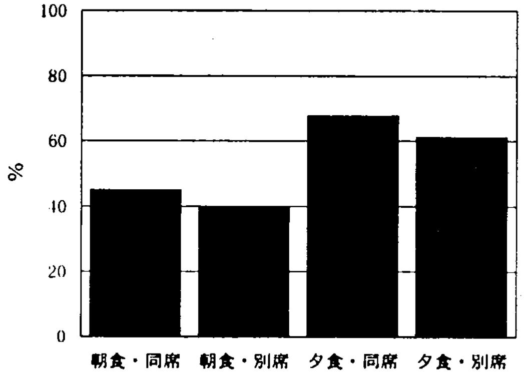

図２－４　祖父母との夕食の同席別にみた献立が全員同じ家庭の比率

Ⅲ　高校生の食事満足度に対する高齢者の影響

1)はじめに

食生活の問題はどのような食品を摂取しており，どのような栄養状態にあるかといった栄養摂取の問題を中心とした研究が主であった。すなわち，人間と食物の関係を考えてきたといえる。

しかしながら，人間の食生活においては人間どうしの関係がいたる場面で重要となる。そのような意味においても，本研究における世代間の相互作用という考え方は重要といえよう。若い世代と高齢者の世代とでは，明らかに食嗜好が大きく異なるからである。若い世代が脂っこい食品を，高齢者世代があっさりした食品を好むことはだれしも知っている。この両世代の者が同じ食卓につくとすれば当然，精神的な葛藤が生じる可能性が考えられる。とくに，超高齢化社会を迎えようとしている我が国においては食生活における高齢者と若い世代との関係は考慮されるべき問題であろう。また，このような見方は，単に栄養摂取の問題としてばかりでなく，精神的な面から食生活をみていくという意味においてもこれまであまり検討されてこなかった視点といえよう。

ここでは，上述した２回の調査結果に基づく，高校生の食事満足度に対する高齢者の影響を検討した。

2)朝食，昼食および夕食の献立に対する高校生の満足度の祖父母との同・別居の影響

朝食，昼食および夕食の献立について，「好き」，「やや好き」，「ふつう」，「やや嫌い」および「嫌い」の中より選択させた。図3-1 に全体にしめる「好き」を選択した割合を示した。

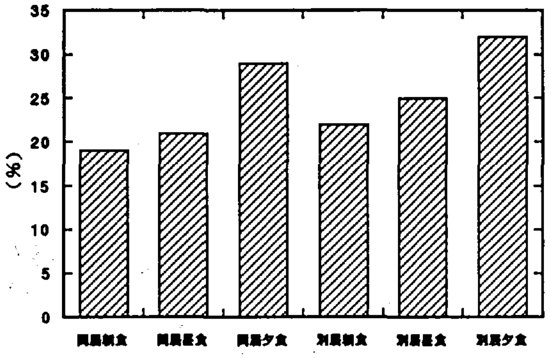

図3-1
食事の献立に対する高校生の満足度（好き）に及ぼす祖父母との同居の影響

全体的に夕食の献立に対する満足度は朝食や昼食と比較して高かった。これはⅡ章の食事の取り方の結果と同様，日本人の食生活特有の夕食偏重の傾向あるいは朝食あるいは昼食軽視の傾向と関係があるのかもしれない。

祖父母と同居の高校生と別居の高校生を比較してみると三食ともに別居の高校生のほうが，「好き」を選択した割合が高かった。第１回目の調査では，朝食については祖父母との同居，別居による高校生の献立に対する満足度の違いはあまり認められなかった。一方，夕食に対する満足度については，２回目の調査と同様に，祖父母と同居の高校生の満足度は，別居の高校生の場合よりも低い結果であった。さらに，図3-2 に示したように「嫌い」を選択した割合をみてみると，昼食においては別居の方が高かったが，朝食および日本人が重要視すると考えられる夕食については同居のほうが高かった。

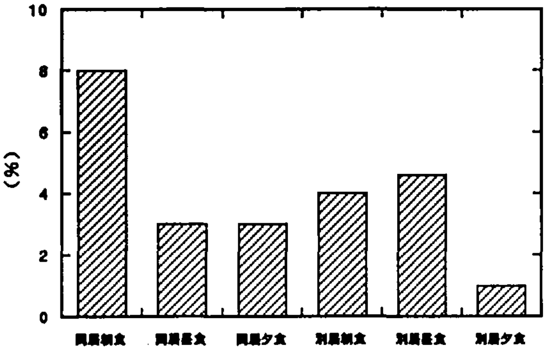

図3-2
食事の献立に対する高校生の満足度（嫌い）に及ぼす祖父母との同居の影響

これらの結果は，献立の満足度という視点で考えると高校生の食生活において，祖父母との同居は，必ずしも好ましいこととはいえない可能性を示している。先に述べたように，一般に若い世代は脂っこい洋風の食品や献立を好み，高齢若はあっさりとした和食を好むといわれている。やはり，高校生にとっては食生活において祖父母との同居は一種の葛藤となりうる可能性があるのだろうか。

3)朝食，昼食および夕食の味付けに対する高校生の満足度の祖父母との同・別居の影響

朝食，昼食および夕食の味付けについて，「好き」，「やや好き」，「ふつう」，「やや嫌い」および「嫌い」の中より選択させた。図3-3 に全体にしめる「好き」を選択した割合を示した。

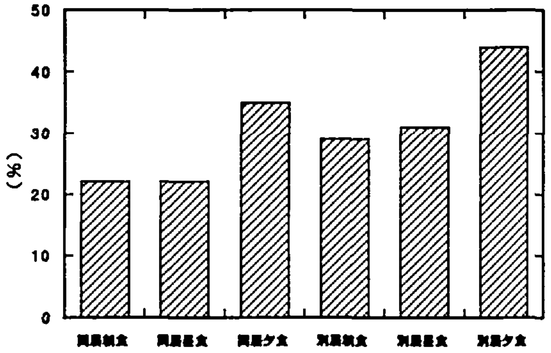

図3-3
食事の味付けに対する高校生の満足度（好き）に及ぼす祖父母との同居の影響

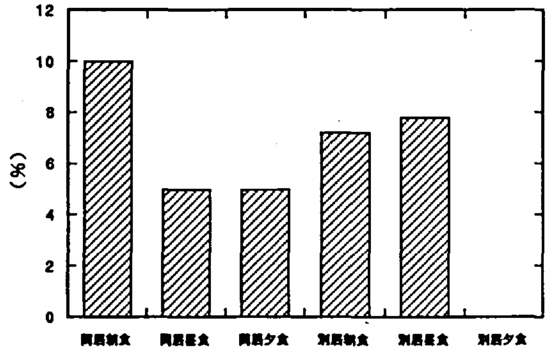

図3-4
食事の味付けに対する高校生の満足度（嫌い）に及ぼすの祖父母との同居の影響

全体的に夕食の満足度は朝食や昼食と比較して高かった。これも日本人の食生活特有の夕食偏重の傾向あるいは朝食あるいは昼食軽視の傾向と関係があるのかもしれない。祖父母と同居の高校生と別居の高校生を比較してみると三食ともに別居の高校生のほうが，「好き」を選択した割合が高かった。さらに，図3-4 に示したように「嫌い」を選択した割合をみてみると，昼食については別居のほうが高かったが，朝食あるいは夕食については，同居のほうが高かった。

身体的，生理的に大きく異なる高校生の世代と高齢者の世代では，塩味のみについても好みの濃度が異なることは，容易に察しがつく。これらの結果は献立についてと同様な結果ともいえよう。

4)朝食，昼食および夕食の高校生の総合的な満足度の祖父母との同・別居の影響

朝食，昼食および夕食の総合的な満足度を評価する目的で，三食それぞれについて，「このままでよい」か「改善したい」かのいずれかを選択させた。図3-5に三食についての「このままでよい」を選択した割合を示した。

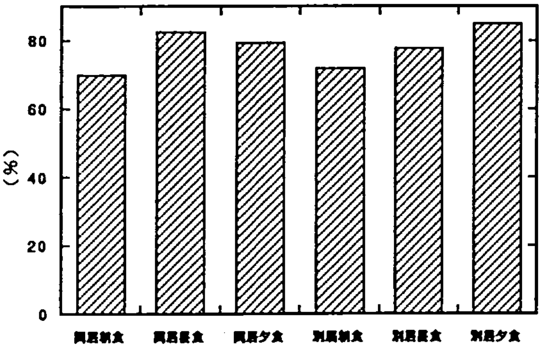

図3-5
高校生の食事の満足度に及ぼす祖父母との同居の影響

同居，別居による違いは全体的にさほど大きくなかった。昼食については同居の方が，別居の場合よりも高かった。朝食あるいは夕食については，別居の方が同居の場合と比較して高かった。とくに，夕食の結果についてみると味付け，献立およびこの総合的満足度ともに別居の方が，高校生にとっては好ましいという結果となった。個々の結果についての精度は必ずしも十分とはいいがたいものであるが，高校生の夕食の満足度に対する祖父母との同居の影響が，1回目，2回目の調査をつうじて繰り返し同様な結果であったということについては，ある程度信頼されるべき事実と考えられるのではなかろうか。

食生活と世代との問題をあつかった研究はあまり多くない。熊江らは，高齢者の栄養素摂取に及ぼす家族構成の影響について検討し，高齢者の栄養素摂取が家族構成により影響をうけ，とくに男性において影響を受けやすいことを報告している[3]。また，長嶺らは，家族構成からみた中高齢者の栄養状態について調査し，複合家族の場合より，中高齢者のみの家族形態の場合が，栄養状態がよいことを指摘し，これは中高齢者のみの家族形態の場合の方が，基本的に経済状態や身体的状態のよい場合が多いためであるとしている[4]。これらの研究に共通していることは，いずれも高齢者を対象としており，しかも精神的な問題ではなく，栄養素摂取や栄養状態についての問題をあつかっているということである。

食生活と世代の問題を精神的な面から取り上げた研究としては，足立が高齢者を対象として，独居世帯，一世代世帯，二世代世帯および三世代世帯にわけて，食生活の満足度について検討している[5]。その結果，食事満足度に対して世帯構成の影響が見られることを示している[5]。

こうして食生活と世代の問題についての先行論文を検討してみると，やはり栄養素摂取や栄養状態を指標としたものであり，また，対象者は高齢者であった。高齢社会を迎え，さらに高齢者が増加しつつある我が国では，高齢者を対象にして考察することは当然といえよう。しかしながら，高齢社会の食生活においては，若い世代が高齢者から受ける食生活上の影響についても検討し，食生活におけるそれぞれの世代間の相互作用について把握し，対応していく必要があると思われる。

Ⅳ 今後の家庭科教育への提言

本研究で実施した2回の調査の調査結果および三年間の研究成果をふまえ，世代間の相互作用という視点から，家庭科教育への提言をまとめておきたい。本研究は家庭科教育の各分野の総合をねらいとしているが，ここでは，各分野ごとに提言をまとめ，それぞれの分野の中で他の分野に関連する事柄にふれていきたいと考えている。

1)栄養学分野

まず，栄養学分野からの提言を述べることとする。

これまで人間の食生活における問題については，他の動物の栄養現象と同じく，食物と生体との相互作用という観点で検討されてきた。人間は成長，あるいは生活していくために，どのような食品あるいは栄養素をどれくらい摂取せねばならないのかという問題である。いいかえると，いかに十分な栄養素を補給するか，

という問題であった。しかし，日本や欧米諸国などの先進諸国においては，現在，食べたい物を食べたい量だけ食べられる時代となっている。その結果，我が国においても一般的に美味とされる動物性食品，動物性たんぱく質あるいは脂肪摂取の過剰が問題視されている。このことが現代の生活習慣病に関係しているとも考えられる。また，一方で孤食と子供の非行との関連などもいわれている。このような問題は，我が国における戦前，戦後の食糧不足による食物的，物質的な食生活上の問題ではなく，主体すなわち人間の側の問題ともいえよう。具体的にいえば，人間はいかにして，いかような食生活を営んでいくか，という問題である。したがって，今後の食生活の問題を考えていくうえでは，従来の食物と人間の関係あるいは人間の生理的，身体的問題に加えて，人間と人間の関係や人間固有の精神的，心理的側面も複合的に検討されるべきであろう。

このように考えてみると本研究における食生活上の世代間の関係は，これまで研究そのものが十分に行われていないばかりでなく，今日的な問題といえよう。また，食生活における問題ではあっても家庭管理学など家政学全般から総合的に考察されるべき問題ともいえよう。

本研究で取り上げた若い世代と高齢者について考えると，食生活上の特徴として，先に述べたように若い世代は，脂っこい洋風の食品や献立を好み，高齢者はあっさりとした和食を好む。また，量的にも若い世代は十分量，高齢世代は少量食べるのみであろう。若い世代が高齢者の食嗜好を取り入れることによって現代の食生活における過栄養や油脂含量の多い動物性食品摂取過剰による生活習慣病等を防御することはできないであろうか。高齢者についても若者の食嗜好を取り入れることにより，不足しがちなエネルギーや栄養素の補給につなげることはできないだろうか。若い世代と高齢者の同居は，現代社会の食生活を理想的にしうるように思われるのである。しかしながら，本研究でみたように精神的側面からいえば，かならずしも両世代の同居が好ましいとはいいきれない。今後，原因やその解決法を検討していく必要があろう。

残念ながら，祖父母との同居が高校生の栄養素摂取にいかなる影響を与えるかについては，ここでは十分検討していない。また，このことに関する先行研究も十分ではない。食生活における世代間相互作用というような問題が，家政学全般から総合的に考えられるようになることが，現代の食生活を考えることであり，充実させていくことにつながるのではなかろうか。

2)家庭管理学分野

次に，食生活と関連させて家庭管理学分野で検討すべき点をあげておきたい。本研究の成果も含めて考えると次の四点にまとめることができる。

第一は，家族成員の時間管理と食生活の問題である。家族成員の時間管理は家庭管理学分野の課題であるが，食生活と関連させていえば，共食の問題につながる。家族成員の食事の時間あわせは，家庭管理学と，栄養学を含む食物分野との接点になる。家族成員の時間あわせの問題は，個々の家族成員に即して考えれば，個人の時間と家族の時間との調整の問題である。これは，食事だけでなく，会話，テレビ視聴，余暇活動など複数の家族成員が集まって行う活動に共通する課題である。こうした活動は「団らん」としてまとめることができる。中学生から高校生の時代は，家族一緒の活動から個人あるいは友人などの家族成員以外との活動に目を向ける時期でもある。こうした時期にある生徒に「団らん」について考えさせることは，本研究の前報でもふれたとおり[2]，家庭科教育における食物，住居，児童，家庭管理などを総合して考えるべき教材になると思う。

第二は，高齢者世代との相互作用の問題である。食生活に即して考えたとき，高齢者と同居することによる食事内容への影響は，栄養学的な問題だけでなく，高齢者との共食あるいは献立の調整などの課題を生じさせている。これらの課題は，家庭管理学的な課題であるといえる。本研究の調査結果から，祖父母との同居は高校生にとって必ずしもプラスの影響を与えていないことが見出されている。もちろん，調査対象である高校生の特性などを考慮したとき，そのまま一般化はできないかもしれないが，少なくとも祖父母との同居に負の側面がある可能性は否定できない。本研究の調査ではより詳細には明らかにできなかったけれども，たぶん，祖父母と同居している場合にも，多様な形態があることは想像できる。同じ家に住んでいて常に交流がある同居の場合もあるであろうし，物理的には同居していても生活はほとんど別々という場合もあろう。逆に，形態は別居でも交流頻度は同居の場合より高いケースもあるかもしれない。交流頻度が高ければ祖父母との関係がいいという意味ではなく，祖父母との関係についての多様な形態ごとに問題を考えていくことが今後の課題である。

第三は，家事労働分担との関連で食生活を考えることである。家庭内で食事をするためには，献立の決定，材料の購入，調理，配膳，後かたづけなどの家事労働が必要である。本研究の調査では，調理者について質問をしている。第1回目調査の結果ではほぼ90% 以上の回答は母親であった。現実の家族内役割分担がはっ

きりと示されている。性別役割分業の是非について考えさせることは，家庭科教育の重要な役割である。性別役割分業の典型的な形態は夫と妻の分業であるが，家庭内役割分担という見地から考えれば，父，母，生徒，生徒のきょうだいという家族成員間の分担をどうするかという課題となる。同居，別居にかぎらず，場合によっては，祖父母を含めた役割分担を考える必要もある。第1回目の調査結果によれば，生徒が調理を担当するケースは数少なかったが，その数少ないほとんどが女子であった。性別役割分業が子ども時代から形成されていることを示す一例であろう。家庭科教育における調理実習の男女共学は，単に調理能力を養う意味があるだけではないのではないか。性別を含む家族の役割分担について考えるきっかけにするような授業を展開することも考えていいと思う。

最後に第四として，家事労働の社会化を食生活と結びつけて考える問題である。家事労働の社会化は家庭管理，家庭経済の分野であつかってきた問題であるが，食生活という側面でとらえると，栄養を含む食物分野と関連する。外食，総菜，弁当の購入などは食生活分野における家事労働の社会化の一例である。家事労働を社会化する要因としては，家計，家事労働分担，家事サービスのあり方についての価値観などがある。食生活分野にかぎって考えたとき，食事サービスを社会化することによる多様な長所と短所があるであろう。この長所と短所は家庭管理学的見地と栄養学的見地とで矛盾する場合もあるかもしれない。外食は母親の家事労働分担を減らす代わりに栄養の偏りを生じるというような場合である。このような問題をどう解決していくかを探ることも，家庭管理分野と栄養学分野の総合につながるのではないかと思う。

3)住居学分野

最後に，質問紙調査の調査項目には含めることができなかった住居分野における提言を述べる。世代間相互作用という観点から家庭科教育の分野の総合を考える場合，住居分野は考慮すべき多くの視点を含んでいる。具体的な調査研究は今後の課題とせざるを得ないが，これまでの住居学研究の成果をふまえた提言を以下にまとめておきたい。

家庭生活における世代間の相互作用を考察するにあたって，知識や情報の伝達は世代間の相互作用として重要な視点であるといえる。住居分野においても，親世代から子世代へ，および祖父母世代から孫世代への知識や情報の伝達は重要で必要な行為といえる。不幸にも学校教育において，住居分野を学習する機会がなかった場合，あるいは仮に機会はあったとしてもその時点においてはそれらを習得することにあまり興味を感じない時もある。このような場合においても，家庭内の情報の伝達あるいは家庭教育の一環として，快適な住まい方に関する知識を親世代から得ることは重要である。

住居分野における最新の科学的知識を学校で学び，子世代から親世代へ，また孫世代から祖父母世代へと情報伝達することは望ましくかつ可能である。しかし，科学技術と家庭電化製品の恩恵を過信し，環境との共生を忘れがちな今日，伝統的知識として家庭で伝えられてきた快適な住まい方はぜひとも親世代から子世代へと伝達すべき知識・情報である。その一部を以下に紹介して，これら伝統的知識が環境との共生にも役立つことの多いことを再確認し，快適な住まい方の基礎として示したい。

日本の住宅は古くから夏を快適に過ごすことを第一目標に設計されてきた。したがって庇や軒の出を比較的長くすることは日本住宅ではごく普通の工法であった。しかし，近年の日本住宅をみると，敷地が狭いことや輸入住宅の影響でこの庇や軒の出が少しずつ短くなる傾向にある。庇や軒は夏の太陽光が室内に入射することを防ぎ，室温の上昇をおさえる。一方，冬は庇の下から太陽光を室内に採り入れ室温を高める。その他，長い軒は壁や畳を雨の湿気から守る働きをしている。

夏の夕日は，夏の暑さの一因ともいわれている。このため西向きの窓の前には落葉樹を植えて，夏は樹木の葉で太陽光を遮り暑さを防ぐ，一方冬は太陽光を室内に入れて室温を高める。また同様の目的で，西向き窓の外に大型の桟を作り朝顔など蔓状の植物を夏季育てて太陽光を遮る。これは室内を暑さから守るだけでなく，住居の周囲にビオトープをつくることになり環境共生にも役立つことになる。

近年，日本の住宅では密閉された室内を夏季クーラーで冷房して使用することが多く，室温を低くすることに十分配慮しているが，室内空気の清浄度については大きな問題が残っている。本来，室内空気は換気や通風によりその清浄度を保っている。このため基本的には比較的低温の外部空気を多量に室内に送り込む，すなわち良い風道を設計して室内の通風を行うことである。このためには室内を密閉することなく通風を中心とした涼のとり方にすべきであろう。その通風を補助するものが扇風機であり，また皮膚からの気化熱を奪うためその効果は大きい。通風のためには窓に網戸も必要となるが，視線によるプライバシーを保護するために外部に簾などを併設することも良策である。

夏季，比較的低い外部気温を得るために，古来より打ち水の習慣があった。この習慣は庭の草木にも有効

でありぜひとも利用したいものである。この点については水資源の視点から疑義もあろうが，雨水の貯水の有効的な利用法としても考慮されるべきものである。

ハウスダストの問題はよく耳にする問題である。ハウスダストの原因としては多くの要素が認められ，カビやダニはその一因であろう。カビやダニは高温多湿で暗く湿気の多い場所を好み，栄養分があれば容易に繁殖する。その具体的な場所が畳やジュウタンである。古くからの習慣として，年１～２回の畳の天日干しがこのような繁殖を防いでいたと考えられる。このような習慣も住居の衛生管理の視点よりぜひ続けたいことの一つである。

日照の問題は各地で論争の種となりやすい事項である。この太陽光のうち紫外線は光化学反応による強い殺菌力を持ち，また波長２９０～３２０mμでは生育作用，血液中の各種要素の増加・生成など健康上特に重要な効果を持つといわれ，健康線とも呼ばれている。この紫外線を室内に入射させる紫外線透過率をみると，普通ガラスが０％であるのに対し，日本で古来から使用されている障子紙は約２０％，また乳児の産着などに使われるガーゼは約５０％の透過率をもち紫外線の確保に役だっている。これらは日本の生活習慣のなかで古くから実用化されているという事実を忘れてはなるまい。

外国を旅行する時に気づくことであるが，日本のアパートには南面に多数の洗濯物や布団が干されていることが多い。これに対し，乾燥しやすい欧米の国々では南窓面に洗濯物などを見ることは少なく建物内で衣類を乾燥させている。この点についても，高温多湿の日本においては洗濯物や布団は乾燥させるだけではなく紫外線にあてて殺菌するという行為が含まれている。これらも伝統的に生まれた生活の知恵といえる。

また，日本人の生活のなかに衣更えの習慣がある。このことを日射吸収率の視点から検討すると，夏季に着用する白色系の衣類の吸収率は３０～５０％であるのに対し，冬季に着用する黒色系の衣類の吸収率は８５～９８％であり，夏季の涼しさと冬季の暖かさを着衣の側面からコントロールしている例に着目したい。

その他，温度湿度の一定した貴重品保管庫としての土蔵造りなど，日本住宅には我々が忘れそうになっている優れた特徴が数多く存在する。今日では，FUTON（布団）やTOFU（豆腐）など日本の伝統的文化が欧米でかなり広く認められていることを考えると，日本の住生活に関する伝統的知識も大切にし，これらをぜひとも伝統的生活習慣として親世代から子世代へと伝える必要がある。

上述したものは情報として伝達すべき事項のごく一部であるが，日本の伝統的住生活は比較的環境と共生しやすいことより，今後とも快適な住生活のよりどころとして，海外から注目される可能性が高いため大切に伝承すべきであろう。

本研究における第２回目調査の実施および集計，解析については，広島大学教育学部家政教育学専修の藤本裕美さん（1998年 3月卒業）の協力を得た。ここに感謝の意を表したい。

引用文献

1) 平田道憲，岩重博文，木下瑞穂，片山徹之，一ノ瀬孝恵，日浦美智代，「家庭生活における世代間の相互作用に関する研究」，『広島大学教育学部・関係附属学校園共同研究体制研究紀要』第25号，145-153頁，1997年
2) 平田道憲，岩重博文，木下瑞穂，片山徹之，一ノ瀬孝恵，日浦美智代，「家庭生活における世代間の相互作用に関する研究(2)」，『広島大学教育学部・関係附属学校園共同研究体制研究紀要』第26号，131-138頁，1998年
3) 熊江隆，菅原和夫，大下喜子，町田和彦，島岡章，「高齢者の栄養素摂取に及ぼす家族構成の影響」，『日本公衆衛生学会誌』第33巻，第12号，729-738頁，1986年
4) 長嶺晋吉，山川喜久江，白鷹増男，磯部しづ子，下野房子，鈴木知子，「家族構成からみた中高齢者の栄養状態に関する研究（第１報）」，『栄養学雑誌』，第33巻，第 6号，295-309頁，1975年
5) 足立蓉子，「高齢者における食事満足度に及ぼす要因」，『栄養学雑誌』，第46巻，第 6号，273-287頁，1988年

参考文献

1) 図解住居学編集委員会，『住まいの環境』彰国社，1998年
2) 瀬沼勲，『室内環境学』三共出版，1980年
3) 梁瀬，長沢，國嶋，『住環境科学』朝倉書店，1995年